

## Web サイト閲覧時における注目点の移動

小坂 貴恵

インターネットはその膨大な情報が高速でやり取りできるため、現在では重要な情報の媒体のひとつとなっている。Web サイトの構成はサイト毎に様々であるだけでなく、その大枠もブログの登場や Flash の導入などによって変化し続けている。そのように多様な構造をもつ Web サイトから、ユーザは自分の欲しい情報を速やかに見つけられているのだろうか。そこで本研究は、Web サイトの構成とユーザの注意の移動順の関係について調べた。

ユーザの注意を測定するために、近年心理学分野で明らかになった「変化の見落とし」現象を利用した。変化の見落としとは、注目していない場所で変化が起きてもそれには気づかないことを示す現象である。この現象を利用して注意を測定するために、フリッカー法という実験パラダイムを用いた。これは図 1 で示すように、画像 A とそれを一部変化させた A' をグレーのブランクを挟みながら交互に自動で切り替え、被験者が変化に気づくまでどのくらい時間を要するかを調べる実験である。ブランクによって画像の切替時に発生する運動信号が無効になるため、変化部分に注目している時に画像を切替えないと変化に気づけない。したがって、実験開始から変化検出までに要した時間が注意の道筋に関係しているといえる。

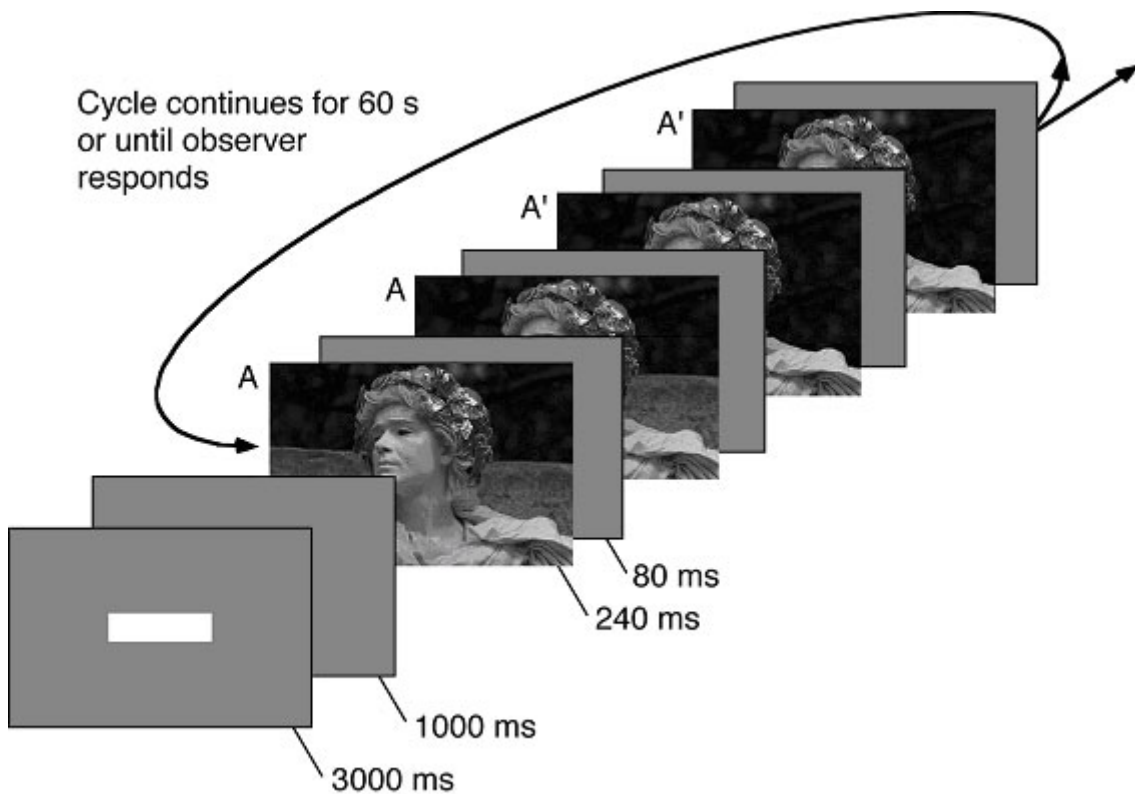


図1 フリッカー法

本研究では Web サイトのトップページの構成要素のうち、主要なものに関して機能別に サイト ID、セクション、メインコンテンツ、サブコンテンツ、ユーティリティの 5 つに分類した。一例を図 2 に示す。そして、それぞれに含まれる 1 アイテムを変化させてフリッカー法に用いることで、変化の検出に要した時間を要素別に比較した。

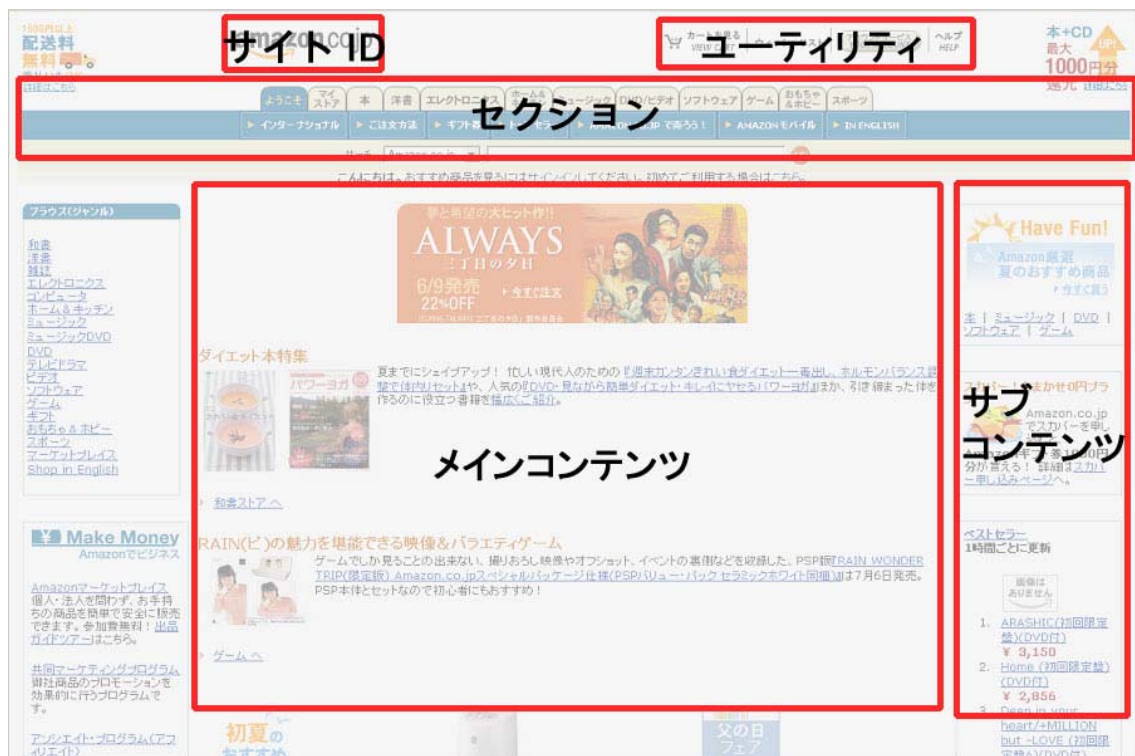


図 2 トップページ構成要素の例

その結果、まずユーザはサイト ID とセクションに注意を向け、次にメインコンテンツ、サブコンテンツとユーティリティという順に注意を移動させていくことがわかった。サイト ID とセクションに注意を向けるのは画面の左上であるからであることも関与していると考えられる。これは Web サイトにおける情報探索の視線情報を調べた研究結果とも一致する。また、変化検出反応が遅かったサブコンテンツとユーティリティに関しては、普段の Web 閲覧行動においてあまり利用されることがないからだと思われる。このことを踏まえると、注目点の移動は画面上の位置と普段の Web 閲覧においてどこを頻繁に利用するかに関連しているといえる。

また、「実験開始直後にまずメインコンテンツに注目した」と報告した実験参加者が多くいたにもかかわらず、実験結果からはまずサイト ID とセクションに注意が向いたということがわかった。つまり実際には、ユーザがまず実験結果通りサイト ID とセクションに注意を向け、次に内観報告通りメインコンテンツに注意を向けたのではないかと考えられる。

(指導教員 森田ひろみ)